

Glosas Emilianenses 研究 IV Estudios sobres las Glosas Emilianenses IV

太田 強正
Tsuyomasa OTA

この「Glosas Emilianenses 研究 IV」は「Glosas Emilianenses 研究 I-III」の続編である。

Glosas Emilianenses は 970~980 年の作といわれ、内容は宗教的なもので当時のラテン語で書かれているが、難しいと思われる語句には、注解 (glosas) が俗語で、つまり黎明期のスペイン語で付けられている。これが所謂 Glosas Emilianenses で、スペイン語の最古の記録である。

この小論においては引き続き Menéndez Pidal の *Orígenes del Español* の巻頭にあるテキストを用い、黎明期のスペイン語を音韻・語形・文法の面から眺めることにする。これに際して glosas だけではなく、ラテン語の地の文章にも注目していきたい。なぜなら、ここに書かれているラテン語は中世ラテン語であるが、あまり教養のない人によって書かれたと思われ、俗語（つまり当時の話し言葉であった黎明期のスペイン語）の反映と思われる誤りが多数見られるからである。

これらを指摘・考察するために、ここでは各文章に番号を付けた。その代り、テキストの glosas に付けられている番号は省いた。

その他テキストにあつて、歴史言語学的考察には不要と思われる記号はすべて省いた。文字 (s) も現代風に改めた。

テキストの [] 内が所謂 glosas であるが、これは元はページの隅や行間に書かれたものである。訳文中の () は筆者の判断で訳文を補うために付けたもので、[] とは無関係である。

Homelia sancti Agustini episcopi
司教聖アグスティヌスの説教

Homelia : 正しくは *Homilia* である。

Agustini : 正しくは *Augustini* である。前にも *beati Agustini* という形が見られた⁽¹⁾。Augustinus > Augustinus は *disimilación* であろう。

V-1 *Primum quidem decet nobis audire justitiam, deinde intelligere, per intelligentiam fructum reddere doctrine [es...ela uel deritura] ...*

まず確かに私たちは正義（とは何か）を聞き、それから理解し、その理解によって教えの実を結ばなければならない。

dejnde jntelligere, jntelligentiam : 下線部 j はすべて正しくは i である。

doctrine : 正しくは doctrinae (doctrina の属格単数) であろう。

[es...ela uel deritura] :

es...ela は不明である。

uel はラテン語の「あるいは」を意味する接続詞であろう。

deritura は中世ラテン語の directura で、ここでは前の doctrine を説明してやはり「教え」の意であろう。deritura は Navarra 方言で、下線部は -ect- > -eit- > -it- と変化したと思われる⁽²⁾。又第一音節の e については、ラテン語には dirigo, directus (< directura) と並んで derigo, derectus という形があった⁽³⁾。

V-2 Non auditores legis justificabuntur [non se endrezaran] apud Deum, set factores...

教えを聞いた人ではなく、それを行った人が神の前で義とされるだろう。

[non se endrezaran] : 現代スペイン語に直訳すれば no se enderezarán である。前の non (auditores legis) justificabuntur を説明しており、意味は現代語とは異なり、やはり「義とされないであろう」の意であろう。

endrezaran の下線部であるが、-dere-あったものが(この語も derectus を語源としている)、V-1 で述べたように同母音の連続を嫌った一種の disimilación によって -dre- となったものであろう⁽⁴⁾。

V-3 Quis est homo qui uiuit et non uideuit mortem

生きている人で死を見ない者がいるだろうか。

uideuit : 正しくは uidebit (uidere の未来三人称単数) であろう。b と v (u) の混同についてはたびたび述べたが、v (u) が他の母音を伴う場合、音価が [w] から [ʋ] へ変化したことによる⁽⁵⁾。この b と v (u) の混同はラテン語の未来形消失の原因の一つである⁽⁶⁾。

V-4 quem admodum [...iuedo] mors jn Adam data est [data...jet] jta dominauitur [...o...o feito je] jn omnibus filiis ejus...

アダムに死が与えられたように、そのすべての子孫において(死が)支配するであろう。

[...iuedo] : 語形、意味共に不明である。

jn : in である。(以下 jn の説明は省略)

[data...jet] : data は、現代スペイン語の dada (dar の過去分詞女性単数形) であるが、母音間の t がまだ有声化しておらず、ラテン語と同形になっている。

jet はラテン語の est (esse の直接法現在三人称単数形) の変化した形である。est > *et > jet と変化し⁽⁷⁾、[jét] と発音されていたと思われる⁽⁸⁾。jet は s は失っているが、語末の t は保っている。この形は、アクセントのかかるラテン語の e が e > ē > ie と規則通りの変化をしており、La Rioja 地方のもので

ある。現代スペイン語の es (< ser) は e が無強勢の母音として扱われた Castilla 地方の形から来ている⁽⁷⁾。

間に... は入っているが [data...jet] で前の data est を説明しており、「(死が) 与えられた」の意。ただし時制は現代語とは異なり、ラテン語と同じ完了過去であろう。あるいは時制の違いを考慮せず、単にラテン語をそのまま置き換えたのかも知れない。

jta : ita である。

dominauitur : 正しくは dominabitur であろう。b と v (u) の混同については V-3 で述べた。

[...o...o feito je] : ...o...o は意味不明である。

feito はラテン語の factum (facere の過去分詞男性単数対格) の変化した形で現代スペイン語の hecho (< hacer) である。ラテン語の -ct- は c が母音化して、-it- の過程を経て -ch- に変化して行くのが、ここでは -it- の段階でとどまっている⁽⁹⁾。語頭の f は [h] と発音されていたと思われる。ラテン語の語頭の f は [h] の過程を経て現代スペイン語の [ø] に至っている⁽¹⁰⁾。

je は前述の jet と同様ラテン語の est, 現代スペイン語の es である⁽¹¹⁾。語末の t が消失している。

feito je は現代スペイン語に直訳すれば hecho es (<それは>為される) であるが、何を説明しているのかは不明である。

V-5 jn uestibus candidis [albis] ...

白い衣裳で...

この語句がどこへつづくのか不明である。

[albis] : まったくのラテン語で、「白い」を意味する形容詞 albus の複数奪格。前の candidis を説明しており、格も一致させてある。

V-6 faciunt certamina [pugna] ...

(彼らは) 争う...

この語句も前後関係不明である。

[pugna] : ラテン語・スペイン語共通の語で、「争い」の意。前の certamina を説明している。スペイン語の pugna はラテン語の pugna の単数対格 pugnam の語末子音 m が落ちた形から来ている。

V-7 jnermis [sine arma] ...

丸腰で...

正しくは inermis である。

[sine arma] : sine はラテン語の語形がそのまま用いられている。現代スペイン語の前置詞 sin (~ なしで) である。arma はスペイン語であろう。(ラテン語では sine が奪格を支配するので armis となるはずである) sine arma で「武器なしで」の意で、前の jnermis を説明している。

V-8 scutum fidei...

信仰の盾...

この語句も前後関係不明である。

V-9 et galea [bruina] salutis...

そして救いのかぶと...

この語句もまた前後関係不明である。

[bruina] : Menéndez Pidal はゲルマン語に由来する後期ラテン語で「胴よろい」を意味する brunia であると説明している。[brúna] と発音されていたと思われる⁽¹²⁾。前の galea の説明としては不適當であろう。

一般にラテン語の -ni- はスペイン語の -ñ- (ɲ) に変化していくが、この音は古くは, ni, ni の逆になった in, ng, gn 等で表わされていた⁽¹²⁾。

Du Cange の Glossarium Mediae et Infimae Latinitatis (以下 GMEIL と略す) にも「胴よろい」の意で brunia, brunea, bronía 等の語が見られる⁽¹³⁾。

V-10 et sentiat [sepat] quis eum deducat [liebat] .

そして誰が彼を導くのかを知らんことを。

この文章もまた前後関係不明である。

[sepat] : ラテン語の sapere (味がする, 味がわかる) の接続法現在三人称単数 sapiat から出た形で、現代スペイン語の sepa (< saber) である。語末の子音 t を保っている。第一音節の e は metátesis によるもので, sapiat > saipat > sepat > sepa と変化した⁽¹⁴⁾。意味も「味がわかる」から「知る」に変化している。前の sentiat を説明しており、「知るように」の意であろう。

[liebat] : 現代スペイン語の lleva (< llevar) で、「連れて行く」の意。語末の t を保っており、前の deducat を説明している。

スペイン語の llevar は、ラテン語の levare (軽くする, 揚げる) から来ているが、語頭の子音 l は, levat > lievát > lleva と変化し口蓋化した⁽¹⁵⁾。v と b の混同については V-3 で述べた。

Glosas Silenses に lieben という形が見られる⁽¹⁶⁾。

V-11 Tunc anima jnmunda dicit :

その時汚れた霊が言う。

jnmunda : inmundá である。

V-12 eu me [uemici] ,

おれはたいしたものだ。

[uemici] : ue mihi である⁽¹⁷⁾。Glosas Silenses にも, nihilumque の代わりに nicilumque という形が見られる⁽¹⁸⁾。前の eu me を説明しており, 意味もほぼ同じと解釈してよいであろう。

eu me の me は感嘆の対格であろうか。mici (mihi) はそれを与格で表わしている。

ue は間投詞であろうが, GMEIL にもこの形は見られない。単なる書き誤りかも知れない。

V-13 magne sunt tenebre...ubi sunt tenebre exteriores [de fueras]

外の闇のある所では... 闇は大きい。

magne : magna であろう。(V-1 参照)

tenebre : tenebrae であろう。(V-1 参照) 二語とも女性複数主格の ae が e に縮約されている。

[de fueras] : 前の exteriores を説明しており, 「外の」の意。fueras はラテン語の副詞 fóras (外へ) から出た形で, 現代スペイン語の fuera の古形である⁽¹⁹⁾。アクセントのかかる δ が, $\delta > \varrho > ue$ の規則的变化をしている。

V-14 et tu jbis [etujras] ubi erit fletus et stridor dentium et multitudo tormentorum [penas] .

そしてお前は涙と歯ぎしりと多くの責苦のある所へ行くだらう。

jbis : ibis (ire の未来二人称単数) である。

[etujras] : 現代スペイン語の y tú irás (そしてお前は行くだらう) で, 前の et tu jbis を説明している。jras (irás) はラテン語の単一形未来 (ibis) をスペイン語の複合形未来 (不定詞 + haber の変化形) で説明している。

語頭の接続詞 e はラテン語の et (そして) とスペイン語の y の中間的な形である。

[penas] : 現代スペイン語の pena (罰, 苦痛) の複数形と語形も意味も同じ語であろう。前の tormentorum を説明している。penas はラテン語の poena (罰) の複数対格 poenas から出ている。ラテン語の二重母音 oe は, $oe > \epsilon > e$ と変化した⁽²⁰⁾。

V-15 Et dicit jterum jnfelix anima :

そして再び不幸な霊が言う。

jterum : iterum である。

jnfelix : infelix である。

V-16 asper est jter.

道は厳しい。

jter : iter である。

V-17 Demones respondent :

悪魔たちが答えて言う。

Demones : Daemones であろう。(V-1 参照)

V-18 asperius [plusaspero mas] te futurum seducimus ad portum plausto [feito] nostro Satane qui ligatus est in puteo inferni...

この文章は意味不明である。

[plusaspero mas] : plus aspero, mas (aspero) であろう。どちらも前の asperius を説明していると思われ、「もっと厳しい」の意。aspero は acento を除けば形も意味も現代スペイン語の áspero と同じである。

plus はラテン語の副詞 multum (多く) の比較級で、「plus + 形容詞」で形容詞の比較級を作っているが⁽²¹⁾、現代スペイン語にはこの形は残っていない。

mas はラテン語の副詞 magis (更に、むしろ) から出た形で、acento を除けば現代スペイン語の比較を表わす más と形も意味も同じである。

[feito] : V-4 参照。この glosa が何を説明しているのかは不明である。

Satane : Satanæ であろう。(V-1 参照) 格は与格か。

in puteo inferni : in puteo inferni である。

V-19 deducimus te ad locum terribilem [paboroso uel temeroso] ;

我々はお前を恐ろしいところへ連れて行く。

[paboroso uel temeroso]

paboroso : ラテン語の payor (恐怖) から出た形容詞で、現代スペイン語の payoroso (恐ろしい)。b と v の混同については V-3 参照。

uel : ラテン語の「あるいは」を意味する接続詞 uel がそのまま用いられている。

temeroso : 現代スペイン語と形も意味も同じで「恐ろしい」の意。

paboroso uel temeroso で前の terribilem を説明しており、あえて日本語に訳せば「恐ろしい、あるいは怖い」。

V-20 carens [lebando] tabernacula justorum, et uidebis simul et scies tormenta impiorum.

(そこには) 義人たちの室はなく、お前たちは不信心者たちの責苦を見て知るだろう。

carens tabernacula : 上記の様に訳したが、構文は不明である。中世ラテン語に見られる絶対対格

(accusativus absolutus) ⁽²²⁾か。

[lebando] : 正しくは levando であろう。b と v の混同については V-3 参照。levando はラテン語の levare (軽くする, 取り除く) (V-10 参照) から出た gerundio で, 前の carens を説明していると思われるが, 意味上問題があるろう。

impiorum : 正しくは impiorum である。

V-21 Tunc iduidunt se [partirsan] in duos hostes...donec [ata quando] ...prout gessit [fezot] sibe bonum siue malum...

その時, 善を行ったか悪を行ったかによって二つの陣営に分けられる...

iduidunt : diuidunt であろう。

[partirsan] : partirse han である。ラテン語の単一形未来にとって代わるスペイン語の複合形未来 (不定詞 + haber の変化形) に再帰代名詞 se が付いた形である。この Glosas においては nafregarsan (II-7), alongarsan (II-10) ⁽²³⁾, tardarsan (IV-9) ⁽²⁴⁾ という形が見られた。

partirsan は現代スペイン語に直訳すれば se partirán となり, 前の iduidunt (diuidunt) se を説明している。「彼らは分けられるだろう」の意であろう。

hostes : 中世ラテン語で castra (陣営) の意がある ⁽²⁵⁾。

[ata quando] : 現代スペイン語の hasta cuando (～するまで) である。hasta はアラビア語の ḥatta から来ている ⁽²⁶⁾。[ata quando] は前の donec を説明しているが, この donec 自体この文章には不必要と思われる。quando のつづりであるが, Real Academia Española は 1815 年の Ortografía 第 8 版で, ラテン語に由来する qu を cu とつづるように定めている ⁽²⁷⁾。

[fezot] : 現代スペイン語の hizo (< hacer) で, 前の gessit を説明しており, 「(彼は) した」の意。ラテン語の fecit (facere の完了過去三人称単数) から出た形である。語幹の e はまだ i に変化していない。

語尾の -ot は弱変化からの類推である ⁽²⁸⁾。I-6 に uenot という形が見られた ⁽²⁹⁾。

fezot は [hédzot] と発音されていたと思われる。ラテン語の語頭の f については V-4 で述べた。z は古スペイン語においては [dz] の音価をもっていた ⁽³⁰⁾。

sibe : 正しくは sive (siue) である。b と v の混同については V-3 参照。

V-22 galea [gelemo] salutis...

救いのかぶと...

この語句も V-9 の et galea [bruina] salutis と同様, 前後関係不明である。

[gelemo] : V-9 では galea (かぶと) が bruina という glosa で説明されていたが, ここでは gelemo という glosa が付けられている。gelemo は現代スペイン語の yelmo (かぶとの一つ) で, ゲルマン語起源の中世ラテン語 helmus から出た語である。第二音節の e は ultracorrección である ⁽³¹⁾。

第一音節の ge (音価は [je]) は, アクセントのかかる e (< hēlmus) が e > e > ie の規則的变化をしたものである ⁽³²⁾。従って gelemo は [jélemo] と発音されていたと思われる。g が [j] の音価をもつ

は、g が俗ラテン語において口蓋母音 e, i の前では、調音点が古典ラテン語におけるよりもさらに前に引き寄せられたためである⁽³³⁾。

V-23 misericors est, ospitalis et, omnia sustinuit [sufriot] propter Dominum omnipotentem, tamen et sperans semper futurum esse profanum [prabatio] ...

(彼は) 哀れみ深く、人情に厚く、全能の主のためにすべてに耐えた。しかしまたいつも冒瀆になるのではないかと心配している。

下線部しかし～以下意味不明である。この文全体の主語（一応「彼」とした）、及び futurum esse profanum の主語も不明である。

ospitalis：正しくは hospitalis である。h は Tiberius（在位 AD14～37）の時代には発音されなくなっていた⁽³⁴⁾。

[sufriot]：現代スペイン語の sufrir（< sufrir）である。「(彼は) 耐えた」の意で、前の sustinuit を説明している。

現代スペイン語の sufrir は、ラテン語の sufferre に由来する俗ラテン語 *sufferire から出ている。

活用語尾 -iot は、ラテン語の -ire 動詞が完了の三人称単数においては -ivit > -iut > -iot > -iō と変化したことによる⁽³⁵⁾。

[prabatio]：前の profanum を説明していると思われるが、この語は GMEIL にも見当たらない。語形からすると名詞であるが意味は不明である。

V-24 Uidebis claritatem Dei sicut facie ad faciem, non per speciem neque per uelamen [quemo enospillu noke non quemo eno uello] quem admodum uidebunt filii Srahel faciem Moysi.

お前たちはイスラエルの子らがモーゼの顔を見るように、像やベールを通してではなく、顔と顔を合せように神をはっきり見るだろう。

この文は新約聖書コリント前書 13-12 を思い出させる⁽³⁶⁾。

[quemo enospillu noke non quemo eno uello]

quemo：現代スペイン語の como（～のように）である。como はラテン語の quōmodo から出ているが、quōmodo の第一音節の uō が、ø > uo > ue からの類推によって ue となった形が quemo（あるいは cuemo）であると一般に説明されている⁽³⁷⁾。

enospillu：eno spillu である。eno は前置詞 en に navarroaragonés（ナバラ・アラゴン方言）の男性単数定冠詞 elo（I-6 参照⁽³⁸⁾）が付いた形である。eno においては、elo の e が落ちているだけでなく、l が前置詞 en の n に同化している⁽³⁹⁾。

spillu はラテン語の spēculum（鏡）から出た語で現代スペイン語の espejo である。spēculum > speculu と変化して行くが⁽⁴⁰⁾、ø > ie の変化が見られないのは、俗語において speculum > *spiculum の変化があったのではないかと考えられている⁽⁴¹⁾。前の speciem を説明しているようであるが意味は異なる。

spillu の-ll-は、俗ラテン語で生じた c'l が現代スペイン語の [x] に到る過程で [ʎ] の段階を経ており⁽⁴²⁾、それをつづりに映していると思われる。

この spillu という語形は、Menéndez Pidal はバスク語の ispillu（これもラテン語の * spiculum から出た語で「鏡」の意）の影響を受けていると述べている⁽⁴³⁾。

なおこの spillu には próstesis は見られない。

noke non : Menéndez Pidal は文字が不鮮明なので、前のラテン語 neque per uelamen の neque（～もまた～ない）を説明する glosa とは言えないと述べているが⁽⁴⁴⁾、語形はともかくとしても前後関係からして意味はやはり「～もまた～ない」であろう。

uello : ラテン語の velum（ベール）から出た形であろう。現代スペイン語の velo である。前の uelamen を説明している。-ll- の音価は、この場合 [ʎ] ではなく、[l] であったろうと思われる。ll のつづりは [ʎ] に対してだけではなく、[l] に対しても混乱して用いられていた⁽⁴⁵⁾。

この [quemo enospillu noke non quemo eno uello] で「鏡を見るように（ではなく）、またベールを通してではなく」の意で、前の (non) per speciem neque per uelamen を説明していると思われる。どういう訳かここでは、non を抜かして per 以下に glosas が付けられているようである。

Srahel : Israhel であろう。

Moysi : Moysis であろう。

V-25 Dicit denuo [altra] anima :

再び霊が言う。

[altra] : 現代スペイン語の otra (< otro) で、「他の」の意。前の denuo を説明していると思われるが意味は異なる。

altra はラテン語の形容詞 alter (他の) の女性形 altera の単数対格 alteram から出た形である。alteram > altra > outra > otra という変化をたどるが⁽⁴⁶⁾、この altra はまだ l が母音化していない。

V-26 magna est letitia angelorum...suabe est [dulce jet] iter [uia] .

天使たちの喜びは大きい... 道は平坦である。

letitia : laetitia であろう。

suabe : suave であろう。v と b の混同については V-3 参照。

[dulce jet] : dulce は現代スペイン語と同形で、ラテン語の dulcis (おいしい・穏やかな) の単数対格 dulcem の語末子音 m が落ちた形である。dulce の -ce は c が口蓋化して [tse] と発音されていたと思われる。[t̥s] は *ç* でつづられていたが初期には混乱があった⁽⁴⁷⁾。jet は V-4 参照。[dulce jet] で前の suabe est を説明しており、「(道は) なだらかである」の意であろう。

[uia] : スペイン語の vía である。前の iter を説明しており、「道」の意。スペイン語の vía はラテン語の uia (via) の単数対格 uiam (viam) の語末子音 m が落ちた形から来ている。

[註]

- (1) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 II」, ロマンズ語研究 22, p.31
- (2) Menéndez Pidal, Ramón, Orígenes del Español, p.281
- (3) (4) Corominas, Joan, Diccionario Crítico Etimológico de la Lengua Castellana, derecho の項
- (5) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 III」, ロマンズ語研究 24, p.67 他
- (6) Lausberg, Heinrich, Lingüística Románica II, p.310
拙稿「Glosas Emilianenses 研究 I」, ロマンズ語研究 21, p.44
- (7) Menéndez Pidal, Ramón, op.cit., p.358
- (8) ibid., p.48
- (9) ibid., p.280~283
拙稿「Glosas Emilianenses 研究 II」, ロマンズ語研究 22, p.36
- (10) Lausberg, Heinrich, Lingüística Románica I, p.311
拙稿「Glosas Emilianenses 研究 I」, ロマンズ語研究 21, p.48
- (11) Menéndez Pidal, Ramón, op.cit., p.358
- (12) ibid., p.49~52
拙稿「Glosas Emilianenses 研究 I」, ロマンズ語研究 21, p.50
- (13) Du Cange, Glossarium Mediae et Infimae Latinitatis, brunea の項
- (14) Macpherson, I.R., Spanish Phonology, p.109
- (15) Lausberg, Heinrich, Lingüística Románica I, p.314
- (16) 拙稿「Glosas Silenses 研究 II」, 神奈川大学「人文研究」(第 93 集), p.17~18
- (17) Menéndez Pidal, Ramón, op.cit., p.340
- (18) 拙稿「Glosas Silenses 研究 I」, 神奈川大学「人文研究」(第 90 集), p.7
- (19) Gómez de Silva, Guido, Breve Diccionario Etimológico de la Lengua Española, fuera の項
- (20) Menéndez Pidal, Ramón, Manual de Gramática Histórica Española, p.58
- (21) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 II」, ロマンズ語研究 22, p.39
- (22) 国原吉之助, 「中世ラテン語入門」, p.65
- (23) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 I」, ロマンズ語研究 21, p.48~49
- (24) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 III」, ロマンズ語研究 24, p.68
- (25) Du Cange, op.cit., hostis の項
- (26) Menéndez Pidal, Ramón, Orígenes del Español, p.374~375
- (27) Lapesa, Rafael, Historia de la Lengua Española, p.423
- (28) Menéndez Pidal, Ramón, Manual de Gramática Histórica Española, p.314
- (29) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 I」, ロマンズ語研究 21, p.45~46
- (30) Macpherson, I.R., op.cit., p.126
- (31) Menéndez Pidal, Ramón, Orígenes del Español, p.194
Du Cange, op.cit., helmus の項
- (32) Menéndez Pidal, Ramón, Orígenes del Español, p.147

- (33) idem, p.48
 Macpherson, I.R., op.cit., p.104
 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 II」, ロマンズ語研究 22, p.34
- (34) Lapesa, Rafael, op.cit., p.422
- (35) Menéndez Pidal, Ramón, Manual de Gramática Histórica Española, p.309~311
- (36) Videmus nunc per speculum in aenigmate, tunc autem facie ad faciem; (Bibliorum Sacrorum Nova Editio による)
- (37) Corominas, Joan, op.cit., como の項。ただし Corominas はこの説明に異論を唱えている。
- (38) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 I」, ロマンズ語研究 21, p.45~46
- (39) Menéndez Pidal, Ramón, Orígenes del Español, p.333
- (40) ibid., p.161~162
- (41) ibid., p.159
 Macpherson, I.R., op.cit., p.149
- (42) ibid., p.148~149
- (43) Menéndez Pidal, Ramón, Orígenes del Español, p.159
- (44) ibid., p.377
- (45) ibid., p.54
- (46) Menéndez Pidal, Ramón, Manual de Gramática Histórica Española, p.54
 Macpherson, I.R., op.cit., p.110
- (47) Menéndez Pidal, Ramón, Orígenes de la Lengua Española, p.63~64
 Macpherson, I.R., op.cit., p.126
 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 I」, ロマンズ語研究 21, p.46

参考文献

- Menéndez Pidal, Ramón, Orígenes del Español, Espasa-Calpe, Madrid, 1976
- Idem, Manual de Gramática Histórica Española, Espasa-Calpe, Madrid, 1973
- Macpherson, I.R., Spanish Phonology, Manchester University Press
- Lapesa, Rafael, Historia de la Lengua Española, Gredos, Madrid, 1980
- Lausberg, Heinrich, Lingüística Románica I, Gredos, Madrid, 1972
- idem, Lingüística Románica II, Gredos, Madrid, 1973
- 国原吉之助, 「中世ラテン語入門」, 東京, 南江堂, 1975
- Bibliorum Sacrorum Nova Editio, 1959.
- 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 I」, ロマンズ語研究 21, 1988
- idem, 「Glosas Emilianenses 研究 II」, ロマンズ語研究 22, 1989
- idem, 「Glosas Emilianenses 研究 III」, ロマンズ語研究 24, 1991
- idem, 「Glosas Silenses 研究 I」, 神奈川大学「人文研究」(第 90 集), 1984.12
- idem, 「Glosas Silenses 研究 II」, 神奈川大学「人文研究」(第 93 集), 1985.12

辞書

Du Cange, *Glossarium Mediae et Infimae Latinitatis*, Forni, Bologna, 1981

Corominas, Joan, *Diccionario Crítico Etimológico de la Lengua Castellana*, Gredos, Madrid, 1974

Alonso, Martín, *Diccionario Medieval Español*, Universidad Pontificia de Salamanca, 1986

Gómez de Silva, Guido, *Breve Diccionario Etimológico de la Lengua Española*, México

田中秀中, *Lexicon Latino-Japonicum (羅和辞典)*, 研究社, 東京, 1981

Diccionario Ilustrado Latino-Español, Español-Latino, Bibliograf, Barcelona, 1974